

静中・静高同窓会
関東支部 会報2



T. NAKAMURA



巻頭のことば

会長 宮沢 次郎

関東同窓会員のみなさまは、
 静中静高出身の立派な社会人
 であり、毎日きびしいお仕事
 の中で忙しく過している方た
 ちばかりであります。

わたくしたちの同窓会は、
 そのような会員の心のふるさ
 とであり、心の憩いの場であ
 り、友情を温める集いである
 と思います。

会員幹事の方々のご努力で
 一昨年六月に誕生したばかり
 の関東同窓会が、日とともに
 会員相互の連携を密にして参
 りましたことは、無上のよろ
 こびです。

なにとぞ、今後ともみなさま
 の一層のご協力を切にお願い
 申し上げます。

総会報告

昭和五十一年度の総会は予定通
 り六月三日午後六時より東京会館
 ローズルームで開催された。

集る会員二八〇名。鈴木同窓会
 長、三浦母校々長、関西中部各支
 部代表、及び会員の恩師である小
 沢、直井、古曳、三上、土屋の諸
 先生を迎えて盛大であった。

又、此日、宮沢会長の尽力によ
 ってトップハンムニア社の美人社員
 の協力を得て受付に華やかさを加
 え、同社の誇るプラスバンドの演
 奏が雰囲気を終始盛りあげられて
 会は同窓生交歓の和気に溢れると
 共に、岳南健児の意気を高らかに
 歌いあげた。

本総会に於て、五十一年度事業報
 告、同会計報告及び五十一年度事
 業計画、同予算を下記の様に承認
 決議した。

昭和50年度 静中・静高同窓会関東支部決算書

(S50.3.18~S51.3.31)

I 取 入	
年 会 費	753,000円
総 会 会 費	1,680,000円
祝 儀	65,000円
準 備 会 会 費	92,000円
会 合 会 費	322,000円
名 簿 売 上	87,500円
計	2,999,500円

II 支 出	
総 会 費 用	1,274,500円
準 備 会 費 用	63,802円
会 合 費 用	500,719円
名 簿 代 理 費	220,000円
郵 送 費	142,000円
印 刷 費	122,424円
事 務 用 品 費	5,935円
写 真 代 理 費	5,700円
通 信 費	340円
交 通 費	3,390円
雑 費	16,000円
交 際 費 (祝儀)	25,000円
計	2,379,810円

III 残 高 (次年度繰越) 619,690円

上記監査の結果適正であることを認めます。

昭和51年4月27日

監 事 村 松 直
 監 事 村 井 東 助

昭和51年度 事業計画

1. 総 会 年 1 回
2. 順 問 会 年 1 ~ 2 回
3. 幹 事 会 年 5 回位
顧問会と幹事会は合同でやる場合もあります。
4. 会 報 の 発 行 年 2 回
計画して居るものはB-5版16頁のもので、関東支部地域在住者(連絡済のもの)約1,500名に発送予定
 創刊号は6月総会迄に発行、第2号は51年10月末の予定
5. 関東支部51年度 名簿編纂発行
総会迄に準備完了の予定

昭和51年度 静中・静高同窓会関東支部予算(案)

(S 51.4.1-S 52.3.31)

I 取 入		
年 会 費	2,000円×750人	1,500,000円
広 告 取 入		400,000円
計		1,900,000円
II 支 出		
会 費 費 用	500円×(50人×5回)	125,000円
会 報 発 行 費	(1,700部×2回)×100円	340,000円
郵 送 費	幹事年5回案内500部×40円 総会1,900部×40円 会報1,700部×60円 名簿・会報・年会費1,400×200円 幹事・本部連絡 20,000円	578,000円
印 刷 費	封筒 5,000×6 ハガキ 2,500×8 案内2,000×8 振替用紙2,000×9 その他2万円	104,000円
名 簿 印 刷 費	250円×1,700	425,000円
通 信 費	電話5,000×12 印電 10,000円	70,000円
写 真 費		15,000円
事 務 用 品 費		20,000円
人 件 費	名簿・会報発送他アルバイト料	80,000円
交 通 費	1,000×5	5,000円
雑 費		30,000円
予 備 費		58,000円
交 際 費	祝儀他	50,000円
計		1,900,000円

老いつつも

なお若さを求めて

直 井 豊

ここ数年毎夏主としてアメリカであるが、海外に出かけている。

昨夏はアメリカからメキシコへと廻り、かの国で国策会社に勤めながら大学院でスペイン語を勉強している娘に会って来た。その折、

過労のためかかの地で風邪をひき、帰国後一ヶ月以上たっても、なかなか治らず、いよいよわれも老いたるかややあわてぎみ。それまで「老人」という言葉を口にすることに抵抗を感じていたが、その後は老いを自ら認めたような発言をすることが多くなった。そんなことから今年これを最後の挑戦と思つて期間も短縮し、行先きもアメリカだけにとどめて七月下旬出発、八月中旬には帰国した。

わたくしはこのごろよく「お若いですな」とか「お変りはありませんね」とか「お変わりありません」とか「おわり

「お若いすね」といわれ喜ばない者はない。特に中年以上の女性はしかりであることはわたくしの経験のよく教えるところである。わたくし自身も自己矛盾していると感じながらも、若いといわれるとうれしい。わたくしは肉体的には老いるとも精神的にはいつまでも若くありたいと願ひ、若さを保つためわたくしなりに努めているからである。

わたくしは若い友人たちの研究やら事業などに積極的に協力することにしてゐる。わたくしの四冊にはしんしんに研究に専念している何人かの若い友人がいる。かれらは出身大学、性の如何を問わずみな同学の士である。かれらの学的進歩、研究の成果を知るとは楽しい。かれらから新しい知識を摂取し、自己の学問を深めることも出来る。またかれらはわたくしにさらに未知の世界を探索する勇気を与えてくれる。また若い実業家たちはその事業にそそぐ情熱、精進、積極性、計画性、指導性をおして、世に生きようと旺盛な活動力、生命力を与えてくれる。かれらに直接接することはわたくしには喜びである。今、いくつかのかれらの企業の顧問をしているのもこのためである。

また、わたくしは若い学生諸君につとめて接することにしてゐる。かれらとの対話はかれらが無限の発展の可能性に富んでいることを教えてくれる。学習をおして、かれらの人間性の開発に協力できることを至上の喜びとしてゐる。全部が全部そうだというわけではないが、かれらの多くは変わりゆく新しい環境に適応しようとして自己の開発にいそしんでいる。かれらのうちに若いころのわたくし自身を発見することもまた容易である。

このような若い力よりも、わたくしに大きな勇気を与えてくれるのは旧静中の卒業生諸君である。静岡を去って名古屋に住むようになってから35年以上の歳月が立つても、静岡の10年の生活はわたくしの心のなかになお生きてゐる。昭和4年天下の名門静中に職をえて、かの地で人の夫となり、3人の子の父となった。それだけではない。当時の諸君が同級会を開くときは、いつも招待してくれ。当時、今もなおそうであるが、欠点だらけのわたくしを責めることもなく、こころよく迎えてくれる。かれらの心の寛さには感謝せずにはおられない。かれらはそれぞれの分野ですばらしい活躍

をしている。かれらの活動はわたくしの血をたぎらせる。かれらの精進ぶりはわたくしへの大きな刺激となり、わたくしもまたかれらに遅くしてはならぬと、だばにむちうつ。かれらは教育の永遠性と創造性を教えてくれ、教育に一生をささげたわたくしの生涯に悔なきことを知らしめてくれている。この意味で、かれらこそ、わたくしの人生の師であることにきめてゐる今日このごろである。

かれらは老いて過去を語ることを許さず、前進の尊さを教示してくれている。いたずらに回顧のうちに生きることなく、将来への展望のうちに生きることの喜びを覚えてくれている。ここにわたくしの若さの源泉があると信じてゐる。

わたくしは、いつまでも精神的に若くありたいと希求している。わたくしは若さの根源を若い友人たちに求めている。そのうちで、静中がもっとも大きな源泉であることをわたくしは忘れてはならぬと自らをいましめている。

「筆者は、昭和四年から同一四年まで静中で英語を教えられた恩師であり、現在、なお南山大学で教育活動をお続けになつて居られます」



かたる

ベレ帽のすすめ

池 田 錫 (23回)

ベレ帽とは、古くから、フランスの農民の間に使われていたもので、これを仏語で「BERRET」と書き、英・独語ともに「BERT」という。日本国の現代人間には、巾広く利用されているが、これは、まことに喜ばしいことである。ただ、その扱い方に付ては、未だ、十分の理解が乏しいようでもあり、また、同窓会幹事の方からのご要請もあり、敢て、茲に一文を草する。

願みれば、私が、昭和七年春、国際冷凍協会(当時、巴里に本部があり、日本も国としてこれに参加していた)の主催により、冷凍肉の輸入検査方法の国際統一に関する協議会が巴里で開かれた時、私は、日本国を代表して、これに参列したが、その時、巴里の一デパートで初めて、自分の顔に一番よく似合った(メーカーにより、

が、ベレ帽のお陰で頭を傷つけることは避けられたのである。最後に、ベレ帽の特権ともなっている点は、何んと言つても、室内でも、儀式張った時の外はいつでも被っておることができる点である。ベレ帽を被ったままでも何の失礼にも値いしないことは、欧米諸国では勿論、我が国でも既に常識となつている。が併し、英国帽子ハンチングは、室内使用は厳禁されている。

なお、我が国には昔から「大黒帽」というのがあるが、これは正にベレ帽に匹敵するものであるのに、我が国の老人専用の帽子としてベレ帽と同様の取扱いはないものであろうか。記して広く我が世論に問う所以である。恰好の佳い国産ベレ帽の出現を望むとともに、ベレ帽にも優る「老人専用帽」の独創的出現を望んで筆を擱く。

容姿端麗なる者

青 木 豊 (59回)

最近の受験地獄は、凄まじい。將に狂気の沙汰である。生まれ落ちた瞬間から大学入学迄、塾通い等して、あたら青春を歪めた勉学の軌道に乗せられている。

ところが、戦前の入試要項に入學条件として「容姿端麗なる者」と言う条項を謳つた学校が吾国に二校だけあった。一校は宝塚歌劇団であり、他の一校は、思いがけない学校、即ち私の出身校たる海軍兵学校であった。今日、若しこんな条項を入試に加えたならば、凡らく「非民主的」と、轟々たる

非難を浴びせるだろう。だが、容姿端麗なる者を指揮官とした海軍は、この戦争で大敗を喫してしまつた。海兵の入試に、「容貌魁異たるを問はず」と言つて広く人材を求めたならば、「ミッドウェイ海戦」にも、あんな負け方はしなかつたかも知れない。

敗戦後の私は建築の設計に従事する事になった。そしたら今日の建築家の主流も亦、容姿端麗なる建物の設計に腐心している。その為、つい、建物の構造強度を犠牲にしがちになっている。今や、

吾が故郷の静岡は地震の恐怖にさらされている。若し、大地震起りしならば、華麗なるデザインを誇っている建物は、倒壊の浮き目に遭われないとの保証は皆無である。今、建物は建築規準法によって、震度〇・二で設計されている。しかし、若し之を一・五倍の〇・三で設計したならば、柱は今よりぐっと太くなって、建物のプロポーションは悪くはなるが、凡らく、どんな地震にも耐えるだろうとの自信がある。その為の工事費は、坪当り僅か一万五千円程度のアツプですむが、今の建築家も施主も之を嫌つて、プロポーションの好い建物を造りたがる。建物の容姿は二の次にして、どんな地震にも耐え得る建物を設計すべきだと考えている。

私の恩師でもあり、且つ、静中の先輩でもある東大教授の梅村先生は、「耐震構造の世界的權威」でおられる。そして、その御名前には「魁」と言われる。この御名前も、何か私に深い御訓えを示されておられるような気がしてならない。

註 梅村先生は東大野球部長を二三年前迄しておられた。容姿端麗で、御座敷やバーでもとてもてぶりは羨しき限りである。

二十五年という 節目に思うこと

清水 汪(59回)

戦後生まれの人が人口の半ばを占めるに至ったという。時代は若い人の手に移りつつあるなどという気がする。しかし、反面で、三十才以上の人が人口の半ばを占めているという点では、老令化社会の到来という感じがする。いずれにせよ寿命が延びたことは確かであり、だから、物を見るにもこれまでよりは長い目で見なければならぬということになる。

終戦直後のあわただしかった異常な時期を別に考えれば、戦後の諸制度には概ね昭和二十年後半頃までに形作られたものが多く、それらは約二十五年を経過したことになる。同時に、それらの制度の下で日本経済は目ざましい復興から発展の道を走って、今日の段階に到達したのである。我々五十九回生が学窓を出て実社会で働いた時期でもある。そして、現在の日本は、色々の意味で一つの大きな転換期を迎えているように思われる。国内的にはもとよりであ

るが、国際的に見ても、これまでの日本のように他の先進国を追いかける立場ではなく、自分の後に多くの国がいるというように様変わりになっている。こうしたことを考えると、私は、今、これまでの二十五年を反省し、これからの二十五年について展望して見る好い機会だと思ふ。これからの二十五年といえ、丁度二十一年世紀を迎える時に当るが、今までの二十五年のことを思えば、それは、時間的にそう遠い将来のことではないように思われるし、同時に、想像もつかない程の多くの変化と進歩の可能性や夢に満ちているように思われるからである。

身近かな一例をあげると、我々五十九回生は現在五十才だから、二十五年経つと、七十五才になるが、これは、概ね平均寿命の範囲内であろう。つまり、他人事ではない。しかも問題は、その頃は既に自らの労働によってではなく、若い世代の労働によって支えられ

る年金その他の社会保障制度によって生活することになるということである。これからは、この社会構造の老令化ということが様々の問題を提起することになる。

別の一例として、開発の問題がある。私は、今年の六月に関東信越国税局長に就任したが、仕事の関係で、埼玉・群馬・栃木・茨城の四県に出かけることが多い。痛

感することは関東平野は広いというのと、同時に乱開発の弊害というところである。良い例の一つとしては筑波研究学園都市計画がある。その中心部に研究・教育機関が設置される地域があるが、この地域だけで東京の山手線の囲む面積に匹敵するという。而もそれは広大な関東平野の中で見れば、それこそ大海の粟粒とまでは言えな

いにしても、極く極く一小部分でしかない。

この例からも分るように、日本の国土は決して足りないことはない。なのであって、要は長期的な視点に立って、秩序のある計画的な開発、都市づくりをやるかどうかの問題であるように思われる。そのためには、一日も早く、官民ともに二十一世紀のための国土総合開発のビジョン作りに意欲をもって取り組むことが切望されると同時に、その前提として、公益ないし公共的開発と私権との調整について皆んなが早く目ざめ、教智を集めることが急務であろう。

ふるさととは近く？遠く？

汽車賃が値上がりになった。たわむれに覚えた頃の三等旅客運賃は、静岡から草薙10、清水19、袖師22、興津25、由比35、蒲原41、用宗11、焼津22、藤枝33、島田44、金谷52、堀之内66(単位銭)、東京2円62銭(今では一五〇〇円)だった。そのかわり「ひかり」なら1時間11分(昔は6時間位)で東京につく。静岡まではやくなっ



写真 左より小沢、直井、古曳、三上、土屋の各先生

東京会館ローズ・ルームにて

おもろう

懐しのC53の響き

——終戦前後の汽車通学——

萩原 多賀男(68回)

たいへんなSLブームである。走っているところを一目見ようとはねられて死人まで出る始末だ。やれデコイチだ、貴婦人のシゴナだどファンは目の色を変えるが、終戦後に汽車通学した私たちはそんなファンが目ん玉をひっくり返してびっくりするほどの経験を持っている。

汽車通についても現在は全部電車。今では電車通とでもいうのだろうか。そのころは列車の本数も少なく、日中は二、三時間に一本動くだけ。朝夕の通勤・通学はラッシュなどという生やさしい混雑ではなかった。窓からの乗降車なんかは序の口。中へ入れただけでもましな方。学帽、といっても戦闘帽だが、吹き飛ばされるのはしよつ中。客車と客車の間のちよつ

はポツ、ポツ、ポツと走るのが当り前だが、C53は3シリンダーとあって両輪のピストンとは別に車体の下にもう一つピストンがある複雑なメカだった。だから動き出す時はポツ、ポツ、ポツではなくポボボ、ポボボと独特なうなり声をあげたものだ。

現在、京都の梅小路機関区に一両だけ残っている。ここにあるSLの多くは動態保存といって、常時カマに石炭をくべ、いつでも動き出せるようにしてあるのだが、C53だけはその特殊で複雑な機関であるがために、故障しても部品が都合がつかないことから動態保存ではない。

最後までSLが動いていた北海道では、C62、C59、C57、D51など、ごく最近までファンおなじみのSLを見ることができたが、私たちにいわせれば、これらのSLはいやに重そうな図体をしていただけで、C53に比べれば気品・スタイル・スピード感などあらゆる点で格段に劣ると思っっている。

私たちは運がいいと、そのC53の最前部に乗ることができた。そこは無理すれば十人前後乗れたと思う。なにせ機関士より前にいるのだから、まともに風圧を受け、痛快というかすばらしいというか

とにかく口では言い表せぬ感動で身を打ち震わせたもの。

十人前後に限られているから、はみ出した者は炭水車の後ろへへばりつくか、もう少し運が悪いと石炭の上だった。そこへ乗ると安倍川の鉄橋を渡る時、タタタタタタンと機関車と炭水車の車輪がレールをたたく快適な響きがあったものだ。

二十四年の初め、沼津から西に向かって進んでいた電化が静岡まで完成、東の汽車通がまずSLとおさらばした。「ヤー、ヤー、まだ煙にむせてやがら」と東は得意顔で西を冷やかす。なにか向こうの方が文化が進んでいるように西はいい知れぬ劣等感に悩



乾杯！ 音頭をとるは池田(23回)先輩
東京会館ローズ・ルームにて

まされたものだ。
浜松まで完成したのがその年の五月二十日。やっと西もELに引かれて通学を始めたが、以来静岡からあのポボボのドラフトは永久に聞こえなくなった。

野球にかけた青春

石山 建 一 (76回)

夏の甲子園大会が今年も全国の野球ファンを熱狂させましたが、この時期になると少年時代に、朝から晩まで野球に明け暮れしていた思い出があざやかに浮かんで来ます。

私の実家は久能山のふもとで莓園を経営していますが、裏は山があり、前には海岸と、トレーニングの場には絶好の場所が有りました。毎朝起きるとすぐトレーニングパンツに着かえて砂浜をランニングしてから久能山の一一五九段の階段をかけ登るのを日課としていました。静高まで自転車で一時間ばかりですから往復片手で運転をして片方の手は軟式のテニスボールを何回も何回も握りかえして握力をつける練習をしました。

授業中も先生の講義を聞きながら机の下ではテニスボールを離した事はありませんでした。授業が終わると三時頃から練習に入るわけですが、当時の静高の猛練習は実に厳しいもので、クタクタになる程しぼられて、暗くなるとボールが見えなくなると浅間山の頂上までランニングをさせられました。

夏の炎天下の練習ではノドが乾いてカラカラになり、練習中は水を飲む事は禁じられていましたから、百本ノックでフラフラになつて頭からバケツで水をかけられ頭や頬に伝わってくる水を口に入れてた事もありません。投手の連中は水泳部の泳いだプールの水をバケツで飲んで飲んだ者もあります。練習が終わると下級生はグラウンドを整備し、部屋の清掃をしてから帰る事になるのですが、その前に汽車で通っている上級生を自転車で乗せて静岡駅まで送る事も習慣になっていました。

久能の方から通っているのは私一人でしたから、田舎道を棒のようになって自転車のペダルを踏むのもいやになるほど重くなった足を引きずって、また一時間の道のりを帰ってゆきました。

農家は朝が早いので、すでに家は寝ていますが、玄関を開けると母が夕飯の仕度をしてくれ、食べ終ると、また自分一人のトレーニングが始まるのです。

風呂呂に入るとまず湯舟につかまって腕立て伏せを二百回、風呂場に常時石を置いていましたから、水の中でそれを持って手首の強化運動を左右三百回。

風呂呂から出ると、エキスパンダー・鉄アレイを使って腕力の強化運動をしたあと、庭に出てよく自分で実況放送をしてバットスイングをしました。

「九回の大詰、静高は一点をリードされて最終回ツーアウト満塁、バッター石山です。ここで石山にヒットが出れば静高は逆点サヨナラ勝ちのチャンスです。甲子園の大観衆は投手と石山の一騎打ちをかたず飲んで見守っています。

石山、手にツバをつけてバッターボックスに静かに入りました」と一振り一振り。カーブだ、シュートだ、スライダーだと自分の頭にコース、球の種類をえがきながらスイングをくり返しました。それから大リーグの本を読んだり、野球の作戦の立て方戦術書を読んで床に着くのはいつも十二時を回っていました。

これほどまで自分が野球に打ち込めたのは、大きな目標があったからです。先ず静高が甲子園に出

場し、勝って静高の校旗を甲子園のメインポールにかかげること、もう一つは自分が全国Z.N.シヨートに選ばれる事と二大目標をかかげていた事です。

動機は中学二年の時でした。練習を終えて宿直室の前を通ると、担任の先生が「静高はどうした」と、甲子園の静高対伊那北戦の実況放送を聞いていた先生に質問しました。「負けたよ」「ああ、又

シンクスは敗れなかつたか」私は「先生、シンクスって何ですか」「石山、静高はお坊っちゃん学校で、甲子園に出る事は出来るが甲子園ではいつも出ると負けなんだよ」

先生は静高出身で、いかにも悔しそうに言いました。

よし！ そのシンクスは俺が破ろう。心に固く誓った日は高松中学の練習が終わって、静高が甲子園で一回戦に敗れた中学二年の夏の日でした。この目標があったから高松中学、静高と続いた猛練習にも歯をくいしばってついて行きました。

三年生になりキャプテンに選ばれ、春の選抜には優勝候補の筆頭にあげられましたが、平安に延長で敗れ、もうこの夏しかチャンスは無いんだと心中決意を固め、猛

練習に励みました。予選の決勝で宿敵静高を敗り、今度こそ静高の校旗をあげるのだと甲子園に向かいました。一回戦の大社高高校に勝って「岳南健児一千の……」校

歌と共にメインポールにあがる校旗を見ながら、先生、やったよ、ついにシンクスは破つたよ、自分の心につぶやいて満足感にひたつた時の事がつい最近の様に思い出します。

二回戦、秋田商、三回戦、北海道、四回戦、徳島商業を破り、ついに決勝戦の法政二高に負けるまで、四回も静高の勝利の旗をあげる事が出来ました。

大会終了後ベストナインの発表がありましたが、もお一つの目標全国のZ.N.シヨートストップにも選ばれ、中学二年の時心に誓った二つの目標は達成出来ました。

ここで後輩諸君に言いたいのは私は早稲田の野球部員に野球の素質とは、体が大きい、力がある、足が早い、肩が強いとか色々言われるが、一番の素質は猛練習に耐え野球がうまくなろうとする意欲が素質だと言っています。五体満足なら死にも狂いで頑張れば、アマチュアの場合水準まで必らず達する事が出来ます。

若い時には、監督やコーチから

君のフォームはこう直した方が更に良いのではないかとアドバイスされたとしたら、何日か後に変わるのではなく、言われた日のうちに何回も何回もシャドウをして夢中で直しているうちに夜が明けてしまった。出来なかつたら、又次の日も続けて、今日、今日こそと頑張つてゆく熱情が素質だと思いません。

野球が上手になろうとしたら、猛練習は当然であり、監督やコーチから怒られたりどなられたりす

るのも当然で、ユニホームを着た時は、自分がバカになってやるのが一番だ。

君達は、伝統ある静岡野球部員だ。甲子園に行くのは宿命づけられていたのだ。さ来年には静岡創立百年祭を迎えます。どうか、ぜひ甲子園優勝を目指し頑張つて下さい。その時には全国の同窓の先輩も集まり、アルプス席は満員になるだろう。今から心待ちにしています。

気楽で何という事もなく楽しい

天下の「江の島会」

村 松 直 (42回)

「神奈川県にも結構静中出身者が居るらしい。一つ呼びかけて懐旧談でもして見たら……」というのが事のはじまりである。そして、それは今から三十年も前のことである。当初でもすぐ二、三十名は集まった。今では三百名位は居る筈である。異郷での同窓はとりわけ懐しく、心の通い合うものであるが、特に静岡県人は人がいい尾か、和やかな後味がいつまでも尾

を引いて、会合が人を増して度重なる。別にむずかしい申し合わせやまりはなく、気楽に楽しく寄り合ったのであるが、矢張り会長が居なくては恰好がつかないというので、すぐに李家孝(二十七回)先輩をお願いした。会誕生の発起人みたいな関係で、会場はいつも三十五回卒の永野清氏経営する所の江の島恵比寿屋を利用させていた

だき、又事務の方は四十二回村松直ということになってしまった。そんな訳で、名称もいつの間にか「江の島会」ということになった。時たま足の便を考えて、横浜辺りに席を設ける事もあったが、矢張り「江の島でやれよ」と言う声が多い。

年毎に会員も増え、存在も明らかになったので、自然静中・静岡同窓会神奈川支部といった様な恰好になったが、実は集まり会する者が、単に神奈川県在住又は在勤の者ばかりでなく、東京をはじめ所々方々から顔を見せるので「神奈川江の島会」の神奈川を取ってしまった方が実情に則するかも知れない。即ち天下の江の島会の方が妥当なのである。又一方、母校同窓会の広域支部としての関東支部が結成された折に、江の島会も人間はこれに包含されるので、江の島会も発展的解消になるのではないかと提言してみたら、即座に「関東支部は関東支部、江の島会は江の島会だ」と強い反発でこの件は引っこめてしまった。やはり長く続いた江の島会を守り育てようとする愛着心の現われといえるし、気楽で楽しい心の広場としての魅力にひかれたものともいえるのが有難い。

なにか自画自賛めいた言葉になつてしまつて恐縮だが、人柄はいいといてもさすがに岳南健児の集り、談論風発、爆笑も亦絶え間がない。うそか本当か、だまされたと思つて一度参加していただき

想い出の言葉

吉 江 誠 一 (43回)

毎年秋になると必ず一度は想い出すことがある。それはもう何年前のことであるが、陸上自衛隊の幕僚長としてアメリカ合衆国を訪問した際、首都ワシントンに三日ばかり滞在した。ちょうど秋もまさに深まろうとする季節で市街地の並木も郊外の木立も色とりどりの紅葉に美しく彩られ、都会とは思えぬ静けさの中で、落葉を踏む音にも何かしみみとした旅の味わいを感じられる想いであった。

十九発の礼砲による壮重華麗な米陸軍の榮譽礼をもって迎えられたのを始め、いくつかの公式行事を経て、三日目の朝、郊外のアーリントンの丘に祀られている無名戦士の墓に花輪を捧げたあと、そのすぐ近くにある第三十五代大統領ジョン・F・ケネディの墓地も訪れた。この付近は一段と木立も深く落ち着いた静けさに包まれていた。故ケネディ大統領のは、墓といつても高い墓碑があるわけではなく、一面に敷きつめた石だたみの間にその名を彫った一枚の墓石が埋められてあるだけであったが、そのすぐ後ろにはトーチが造られており、「友情の灯」と呼ばれる炎が赤々と永遠に燃え続けて、若くして兇弾に倒れた偉大な政治家に対する国民の思慕と追憶とを表わしているかのようにであった。心からの敬意をもって拝礼を終わったあと、ふとあたりを見ると墓地を囲むようにして低い石垣がめぐらされ、その一つ一つにケネディ大統領が在職中おこなった演説や談話の中での有名な言葉の一節が刻まれていた。その一つに、

And so my fellow Americans,
ask not what your country can

do for you, ask what you can do for your country.

というのがあった。

「わが同胞諸君、諸君のために国家がなにをしてくれるかを問うよりも、諸君によって国家のためになにができるかを考えたまえ」という意味であろう。(こんな訳では英語の先生に叱られるかも知れないが……)

たしか彼が大統領就任後間もない頃におこなわれた「ケネディ・アピール」といわれる演説からの一節だったと記憶するが、第二次世界大戦を終って十数年、世界のどの国も多かれ少かれ戦後の復興という内向的な仕事も終って、こんどは逆に、今まで埋もれていた民族的なあるいは国家的な矛盾や諸問題からくる内外の紛争や戦いが世界のあちこちに散発した時であり、アメリカ自身としても対内的には戦後の復興から平和な繁栄、引いては民心の爛熟をも招き、人々の心の中に、安逸と権利は求めても自ら激刺として義務を果たそうとする気概が影をひそめようとし、また対外的には、前に述べたような世界各地での紛争や戦いに対して、大国として如何に臨むかの問題に迫られている時に内外注目うちに選ばれた若い大

統領ケネディの「求めるよりもまず果たそう」とするこの言葉は、彼の軒昂たる意気鮮烈な気魄を示すものとして当時強く私の心を打ったものであったが、たまたま彼の墓前に立って、そこに刻まれたこの言葉を眺め、あらためて自分に直接呼びかけられたような深い印象を禁じ得なかった。

私たちが、国家とか社会とか或は職場や家庭といったグループの一員として、それらの全体や多くの人々からいろいろと恩恵を受ける代りに、逆にまたその構成員の一人として、他の人々やそれらの全体のために力を注いで果してあげねばならない大切な義務があるのであるが、こんどのように、いわゆる文化が熟し豊かな物質に恵まれてくると、その豊かさによって他に奉仕しようとするのとは逆に、自分だけがより多くのもの、より高度のものを得ようとする欲求にばかり心が走り、それが思うように満たされないと、とかく政治や社会や職場の管理やあるいは他人といったものの悪さのせいにしてがちであるが、悪条件や苦しい障害や他人とのアンバランスの不满などを訴える前に、自分自身のある限りを絞って明るく逞しく、まずみずから果たせることをなす

遂げて行きたいものだと思う。

私にとつての想い出の言葉はいろいろあるが、毎年秋が深まる頃必ずといってよいくらいあのアー

所 感

リントンでのひと時を想い起し、このケネディの言葉を、今でも自分自身への励ましの訓えとしているのである。

鈴木 弥 門 (45回)

外国のことはよく知らないが、わが国では学校と名がつけばどんな小さなところでも卒業生で組織された同窓会が必ず存在する。同じ学校で学んだというだけの因縁で結ばれたものだけに、社会生活の中でわれわれが関係する他の団体とは全く異なった特異なものである。会員を結びつける絆は、幼い頃あるいは青春の頃の思い出としてそれぞれが描いている母校のイメージ、在学中の先輩・同輩・後輩との交わりの懐かしさ、そして母校がより発展してほしいとの願望くらいのものであろう。つまり全くメンタルな絆だけである。例えば、母校の野球部が全国大会でよい成績をあげたことを知って嬉しくなり、りっぱな仕事をした人が同窓生と知って喜び、同じ会社で同窓の先輩や後輩がいると知って心強く思ったりする。こうした

の歴史を持つともなれば同窓生の数も膨大であり会員の年令差も相当である。年令差は当然それぞれが育った世代の違いによって社会意識や価値観の多様化を生じ同窓会に対する期待感をまちまちにさせるのである。大方の同窓会では古い先輩が中心となって運営されるのが常であるが、年一回の総会も、若い同窓生からは老人先輩たちのマスターベーションに過ぎないではないかと批判して参加を渋り、といって若い人達に企画させるとダンスパーティーを主体とする総会になってしまつて古い先輩たちのひんしゆくをかう。そして結局は幹事たちがくたびれて定款どおりの形式的なものとなり一部少数の人達のサロンとなつてしまふ。このようなことは私の長い教員生活の中でよく経験したことがある。また、同窓会はその性格上親睦団体であるにも関わらずそれが一つの人格を持つと、それ自身が会員の意向とは無関係に独立して走り出すこともある。ある大学の同窓会は法人組織で何億の財産を持ち多様な事業を行い母校に対しても相当の発言力を持つやに聞いたことがある。それ程ではなくても、とかく同窓会が母校やそれに関連する記念事業などの資金集



「岳南健児一千の……」一校歌合唱

6日3月 総会会場にて

めや選挙の際に特定候補の票集めの媒体として利用されたりすることがある。同窓にはのぼりとした郷愁を持ち打算を考えないものからすれば、このようなことは意外なことと感じ、同窓会を敬遠してしまうことになる。何としても同窓会の運営は難しいもので、それだけに運営の衝に当たる幹事の苦心は大きいものである。

同窓は、同期という横のつながりと先輩後輩という縦のつながりの両面を持っている。校友会の部活動に参加した経験のある諸君を除いては、前者のつながりの方が強いのが一般であろう。であるならば同窓会は同期会の連合体と考え同期会を先ず活性化することが大切ではないかと考えるが如何であらう。

バトンタッチ失敗考

岡村 英二郎 (67回)

人には得手不得手があり、また人生の歩みには運・運否があるとすることは、大方の認めるところであらう。

私は足が遅い。小学校以来、運動会でのカケッコで上位に入ったことはない。しかし障害物競走は常に一番とはいえないまでも、速いほうであった。

想い出は、高三当時仰高(こうこう)祭運動会である。

私達は旧制中学に入って、在学中に新学制が敷かれ、昭和二十三年四月から新制高等学校の生徒となった。当時、学校教育の行政施策については、当局も模索中であ

ったのだろう。新制高等学校一年の時は、通年制ホームルーム制が敷かれ、二年になると、同一学年だけのホームルーム(従来のクラス)に戻り、三年になって、また通年制のホームルームが設けられた。

三年の時、私の属したホームルームには、同年では、屈託のない明朗さで友人達を引きつけていた

金子堅司君や、一年下では私と同年で、現在日本経済新聞に勤める傍ら、教育評論家として新聞・テレビで活躍している大石脩而君の弟の康博君や、鈴木昭夫君達の優秀な顔があった。大石君も鈴木君も東京大学を出て、それぞれ実業界で活躍中だと聞いている。

仰高祭は、静中生、静高生全員が、年一度、学業の発表の場として、あるいは青白さからいっとき離れて、その青春を集中的に燃焼させた祭りであった。今でも仰高祭は伝統的行事として受け継がれていることだろう。

その仰高祭運動会でのホームルーム対抗リレー競走に、この鈍足の私が、どういいういきさつだったか参加することとなった。私はリレーの中盤に順番を待っていた。わがホームルームは快調なスタートを切った。嬉しさと喜びの中に自分の足を考えると不安と心配がよぎって、いささか武者震いの体様が覚知されないでもなかった。いよいよ自分の番だ。順位は確か

一位だったと思う。うしろを見ながら徐々に足を進めた。さあ、バトンはいただき……。そのまま鈍足に鞭打って、思いきり走ろう……と、その時、ああ何たること、受け取った筈のバトンが、スルスルと自分の手の中から抜け落ちてしまったのだ。一度落ちたバトンは逃げ足も速い。すぐ拾い取ろうとしたがコロコロ転がってなかなか掴めない。後位の他のチームは、どんどん追い抜いていく。結果はいうまでもない。がんばったチームメイトに全く申訳なかったと今思い出しても慚愧に顫える。

詩に起承転結があるという。人生にもそれはいえよう。起・承・転・結それぞれに、円滑なバトンタッチが要求される。対人関係についても、また仕事を遂行していく上にも、バトンタッチは重要かつ重大な意義を持つ。

その後失敗続きの私の人生歩きだったが、失敗のたびごと、周囲の多くの方々にご迷惑をお掛けしてきたわけで、それはすべて不徳の致すところであり、いわばバトンタッチの心構えと方術の拙さの改善努力を怠っていたという証左でもあり、洵に面目次第もなく、こうした失敗体験を、肝に確かめつつ刻み込んでいる此頃である。

芸大に

静高関をつくった仲間たち

高 木 滋 生 (70回)

大村政夫先生―美術の先生として昭和24年から昭和50年の停年退職まで実に27年間、静高に奉職されていた事は周知の通りである。

ユニークな先生として戦後の静高生の中で知らぬ人はいない。又、これ程長く、一つの学校において後輩の指導に当られた先生も他に例を見ない。

永年の静高在校中の功績の中に特筆すべき点が三つ程あげられる。その一つは、野球部長として情熱を野球に傾け、多くの選手諸君を育て、選手の中に根性を植えつけた。その根性の結集によって甲子園出場を6回もはたし、ややもするとすべてをドライに割り切ってしまう現代っ子にカツを入れ優秀な選手を育て上げた力は特に大きい。

第二の点は、彫刻家として、終りのない芸術の目的にむかって、前向きに一步一步前進していることであろう。当然といえど当然であるろうが、ともすれば、先生稼業に流されて、芸術家の生命を失う

人の多いこの社会にあって、自己を益々磨き上げていったプロ根性は立派である。

我々が、先生のアトリエでレッスンを習っていた当時も、夜はコソコソと製作に励んでおられたし夏休みには、パンツ一つで、背丈より大きい大木にノミを当てていた姿が目につかぶ。

日展には、毎年入選され、この間に特選二回、現在は審査員になられ、この世界では、押しも押されぬ第一号者となっている。

第三の点は、これからは本題となるが、この在職中の27年間に実に多くの芸術家やデザイナー、建築家を育て上げたことである。先般発行された毎日新聞社の「わが青春」にも取り上げられているが、先生を中心に、教え子の中から自づと出来たグループ「O」という組織がある。作ろうとして出

来たグループではなく、何んとな先生を慕って集ったグループである。静高生ばかりでなく、城北高や清水東高からも先生のアトリ

エに集り、レッスンを習い、先生の製作にふれ、心にふれ、明日のデザインを語り合いながら勉強した仲間達である。

このアトリエから育ち、美術系や技術系の大学へ進み、社会に出て立派な仕事をしている仲間達がすでに二百人を越えている。

芸大に例をとっても、合格した連中が八十人近く数えられる。芸大の歴史を振り返ってみても、地方の学校から、一人の先生からこれ程多くの学生を進学させた例はない。

PR になって恐縮ではあるが、ちなみに芸大は、一学年一八〇人しか学生をとらない。全校合せてもマンモス校の一学科より少ない人数である。例えば、私が受験した建築科は10人、国立一期校の中で一番倍率の高い科であった。試験は4次試験に面接まであり、その都度、しぼられていった。1次

が総合学科、2次が写生、3次が製図を含めた感覚テスト、4次が数学と全科目から出題させる学力テスト、そして面接、気の遠くなる試験であった。その10人しかとらない建築科に、大村先生が在職

されてから毎年1人ないし2人の静高生を送ったのだから立派である。先生が言うように静高は芸大

では、東大で言う当時の日比谷高や灘高以上の価値があると言っておられた。

東大は勉強すれば入れてくれるが、芸大は東大生が逆立ちしても入れない学校の一つである。そんな自負心を持って皆受験したものだ。

参考までに、大村先生が静高に來られてから芸大に進学し育った仲間達を紹介すると、先づ、草分けとして65回の藪崎 昭さんがいる。日本画科を優秀な成績で卒業した実績がある。

66期では図案科(現在工芸科)の増田高美さん。森永製菓の宣伝部におられ、我々にもなじみのある森永のパッケージのデザインを担当している。この方はなかなか豪快な方で我々は受験時代いろいろとお世話になった。私と同輩の岩崎君など、受験前日、彼から、

「今から勉強しても始まりらん。パチンコでもして来い」といわれ、忠実にパチンコと麻雀に精を出し夜を徹し遂に彼は下宿に戻って来なかつたエピソードがある。

67期は中村次雄さん。積水化学のデザイン課におられ、積水が多方面に販路を拡張している中で、その卓越したデザインを担当している。

68期には、松下俊彦(建築)さん。特に建築科の中に静高関をつくった第一号である。現在は名古屋で設計事務所を営んでいる。その他、東京でデザイン事務所を開いている築地六郎さん、望月好夫さんが居られる。

69期は芦原設計事務所のチーフとして、駒沢のオリンピック体育館等を設計した沢田隆夫さん。同期の小柳誠一さんと共に我々後輩に感覚的に静高カラーを導いてくれた恩人であり、その感覚の優秀さは抜群だった。

70期は、デザインでは岩崎堅司君、ワンカップ大関のアイディアを打ち出し、そのために大関は急上昇に成績をのびしている。その功績を買われ、フリーでありながら大関は彼と終身契約を結んだ。

若林久二君は、いすゞ自動車でベレットのデザインを担当し、その後三和刃物に転職し、現在は刃物のデザインに熱中している。私の方は及ばずながら、東京・静岡に設計事務所を開設し、かたわら女子美大で後輩の指導に当たっている。音楽の方では、五条朝男君がおり、静岡放送のディレクターとして大活躍している。

71期には、曾根幸一君、東大の大学院に進み、丹下健三の弟子と

して万博では力をふるった。現在は独立し、芸大建築科の講師を兼ね、建築界でも著名である。

相川東一君は竹中工務店設計部において大きい建物の設計に従事している。

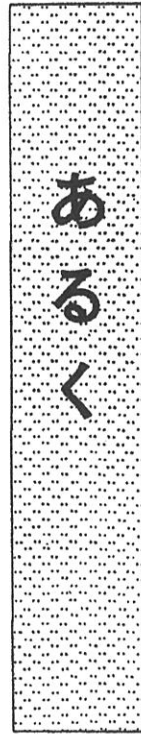
72期には、田宮督夫君、学生時代に日宣美展に入選し、現在フリー、父親の経営する田宮模型のプラモデルの企画等も担当している。尚、奥さんの千穂さん(城北卒)は、ジュリー・デザイナーとして全国的に有名である。佐藤允弥君は、本田技研にあって各種デザインに力を発揮している。

73期では、小林篤夫君、建築科卒業後、住宅公団に就職し、春日井団地を初め、大きい団地のマスター・プランを立案している。同期の奥島 治君、松永文夫君も優れた設計事務所において日夜努力している。又、彫刻家として、静大や常葉短大で教鞭をとっている細谷泰茲君もいる。

書き上げていけばきりがないので、後は後輩に別の機会にゆずるとして、その後の諸君は、75期の中川征男君(工芸) 76期の渥美浩章君、伊藤方也君、77期の小川素子さん、中山礼吉君、78期の清水邦彦君(建築)、友安 昭君、間中一枝さん、石川暢子さん、赤城

健一君、等続々と登場して来るけれど、この辺で打ち切りたい。

たまたま芸大中心に書いてしまったが、大村門下生にあって他校へ進学し、デザイン界で活躍している仲間もかなりおられる。この



ベルリン

オリンピックの回想

佐野 理 平 (45回)

私は幸運にも、昭和十一年(一九三六年)オリンピック初参加の蹴球チームの一員として、ベルリンオリンピックに参加する事が出来ました。当時のスポーツ界は、学生中心でありまして、どの競技も学生のチャンピオンが日本一という事でした。当時早大は三年連続日本一という事だったので、早大中心のチーム編成になり、選手十七名中十一名が早大で、なお十七名中六名が静岡県出身者でした。浜松一中出身者堀江、加茂兄弟、志太中出身者松永、笹野、静中私、松永君(第二次大戦中南方

で戦死されました)は文理科大学、他は何れも早大で現在健在です。本大会にはこの他水球チームに校友の高木・新聞両君(早大)水泳に牧野、小池、宮崎君等多数が選手として参加し、静岡県はスポーツ県として名を馳せたことでした。

六月二十日特別列車で東京駅を出て、シベリヤ經由ベルリンに向きました。シベリヤ鉄道一週間、ベルリン到着迄二週間を要しました。途中モスコウで列車乗換のため僅かの時間でしたが、モスコウ市内をバスで見学致しました。夕

暮に車の中から瞥見程度で格別興味をそそられる様なものはありませんでした。日本大使館の好意による握り飯が強く印象に残っています。当時は日独防共協定の数ヶ月前でしたので、日本の選手団については市民も好意的でありましたし、新聞も盛大にとり上げていた様です。

オリンピック村の村長はじめ、世話役はすべて軍人でしたが、仲々行届いた管理でした。大会終了後は陸軍病院に利用するとの話もあった程で、樹木の多い広い地域に宿舎が点在する設計になっていた様に記憶しています。開会式迄約一ヶ月間の期間がありましたので、練習の合間に適宜市内見学、買物もたどたどしい言葉と身振手真似で結構楽しく出来ました。ライカ、コンタックス等独乙製のカメラを肩にかけ、がに股で歩いているのは日本人だと国籍見分け方の記事もあった様に思います。

大会運営が軍の主導で行われていたので、開会式も国威、軍事力誇示型のもので、ツェッペリンの飛行船が会場の上空を飛び、各国選手団、観客の注視のまとなっていました。型通りのヒットラーの開会宣言ではありましたが、彼が入場した時は場内一斉にハイル

ハイルと言って、右腕を水平に挙げての敬礼は誠に壮観の限りでした。本開会式の新しい試みとして聖火リレーが取入れられ、爾後開会式の主要な行事になった訳です。この大会に於ける日本選手団の活躍は目覚ましいもので、陸上では田島、南部、西田、大江、村社、吉岡、孫。水泳の牧野、葉室前畑の各選手の健斗は、今もってスポーツ界の語り草になっています。私もこれらの激戦に熱狂し、国歌吹奏と共に掲揚される日の丸を涙と感激で仰いだものでした。遠い異国で仰ぐ日の丸は格別の感情を沸かせました。

新しい戦術、フォーメーションを学び得た事が、外国人との試合といえは、横浜の外人倶楽部である YCAC か、寄港したイギリス軍艦の乗組員との試合位のもので、経験の浅い私達がスエーデンに勝てたのは勿論チームの努力もありましたが、このことが大いに役立つたと思います。

閉会式までの時間を利用し、エッセン市を訪ね、クルップの工場や市内を見学し、地元チームと試合しましたが、六〇で負け、帰途スイスのチューリッヒで、グラスホッパー（戦後来日した事のあるチーム）と対戦、十四―一の大差で負けました。このゲームは夜間照明の下で行われ、初経験で大いに泡を食った訳ですが、その当時ヨーロッパの国々では、この様な設備をもったグラウンドが各所にあるのだらうと思ひ、大いに驚いたものでした。

閉会式後はチューリッヒ、ロンドン、パリ、マルセイユの各都市を見学し、八月末マルセイユより日本郵船の最優秀船鹿島丸でスエズ、コロンボ、シンガポール、ホンコン、上海經由神戸に上陸して一ヶ月余の永い船旅を終え、十月初め帰国致しました。各寄港地で二乃至三日の見学が出来、大変有

意義でした。船がスエズ運河を通過する時間を利用して、カイロ市内、ピラミッド、スフィンクス等の見学は本旅行中の印象深い見学の一つでした。

現代の航空機利用の旅と違って百日を越す本大会参加の旅でしたが、往は陸路、帰りは海路と数多い外国の都市を訪れ、多彩な見聞と多数の知己を得たことは、私にとつては得難いチャンスでした。従つて私達チームの参加に尽力し

お江戸日本橋

杉山栄一 (47回)

忘れられる東海道

新幹線の開通で東京―大阪間は日帰りのできる時代になり、東名高速道路の誕生で、旅行はますます便利になった。だがその反面、昔華やかだった「東海道」は次第に忘れられてゆく。

「東海道」は今の国道の脇に沿つて、途中を寸断されながらも、いまだに続いている。

そこには戦禍に生き残った松並木やほこりにまみれた道しるべ、地藏さんが、昔からの庶民の生活

て下さった関係者の方々、併せて私に早大入学を勧奨し、部の主将として厳しい指導をして下さった校友井出多米夫先輩に感謝の念を持ち続けているのです。

昨今のオリンピック大会には、政治の問題が介入し、スポーツの祭典という語意を素直に受け取れない複雑なものになって来た様に思います。近代オリンピックの創始者クーベルタン男爵は地下でどんな心境でおられるでしょうか。

とともに細々と生き残っている。

歌に残った東海道

人々は「東海道」を忘れていく。だが幸いにも「東海道」への追懐は、広重の版画や東海道五十三次を唄った民謡「お江戸日本橋」の中に残っている。この歌は学校や各種合唱団のコーラスで、ラジオやテレビを通して、しばしば耳にする。しかしこの民謡も最初の一節は広く知られているが、それから先を知る人は少ない。これはお江戸日本橋をふり出しに、大津か

ら都入りするまで全部で十八節あり、東海道五十三次の道中の宿場や名物、名所を次々に面白く唄いこんだ江戸時代末期の庶民文学が生んだ傑作だ。

「七つ立ち」七つは寅の刻、今でいえば午前四時ごろの出発だ。だから品川の手前、高輪に着く頃は、ようやく提灯を消す明かるさになったわけだ。

こちやえ節

天保時代の流行歌に「はねだ節」というのがあって「お前待ち蚊帳のそと、蚊に喰われ七つの鐘の鳴るまでもこちやかまやせぬ」という文句で唄われた。この「はねだ節」が変形し「お江戸日本橋七つ立ち」となったのは明治四年頃だという。明治年間には「こちやえ節」という名で流行した。

「お江戸日本橋」は、たいていの家庭の奥様や子供さんたちがご存知なので、これを唄つて「東海道」を唄び、またこの歌が皆様のために何かのお役に立てば幸いです。特に静岡、島田附近を唄った作品は面白い。是非愛唱していただきたく、未熟な研究だがここに披露する。お気づきの点あらばお教えを乞う。

「恋の品川女郎衆に袖ひかれ乗りかけお馬の鈴ヶ森 コチャ

大森細工の松茸を コチャ

品川には遊廓があった。よその宿場女郎衆よりはるかに格が上だった。九州の福岡まで名が知られ「博多どんたく」で「ぼんち可愛いや寝んねしな 品川女郎衆は十匁」と唄われたくらいで、揚げ代は十匁だった。鈴ヶ森は刑場で、現在高速道路の鈴ヶ森口、馬の鈴から鈴ヶ森とかけてある。大森では麦藁細工の土産物を売り「花たて」などが多かったようだ。

松茸は意味深長だ。女郎衆にひつばられ、「馬にのりかけ」たので「松茸」を登場させたのだから。

六郷わたりて 川崎の

万年屋 鶴と亀との

よね饅頭 コチャ

神奈川急いで 保土ヶ谷へ

コチャ

コチャ

コチャ

コチャ

コチャ

コチャ

コチャ

多摩川の六郷の渡しを越せば、川崎の万年屋という茶店があり、名物の奈良茶飯を喰べさせた。鶴屋、亀屋という菓子屋では名物のよね饅頭を売っていた。

へ 痴話と口説を品濃坂

戸塚まえ 藤沢寺の
門前で コチャ

止めし車を綱でひく

コチャエー コチャエー

江戸を出た旅人の第一日の宿泊地はたいして戸塚だったので、その手前の保土ヶ谷の旅籠の飯盛女（とめ女）たちは猛烈に客ひきをした。保土ヶ谷へ泊めさせるためだ。戸塚の前の品濃坂辺まで客にからんで口説いたわけだ。藤沢は遊行寺坂に時宗の総本山遊行寺があり、門前町として栄えていた。

へ 馬入わたりて 平塚の

女郎衆は 大磯小磯の

客をひく コチャ

小田原評議で長くなる

コチャエー コチャエー

馬入川を渡ると平塚だ。大磯小磯の地名を利用し大勢の客を引く意味にかけた。小田原は小田原城で、秀吉に攻められた北城氏が、

和陸の評定がいつまでも決定しなかったためにダラダラ会議を「小田原会議」という芳しくない言葉の後世に残した。女郎衆を買うか止めるか決しかねたことも意味している。

へ 登る箱根の お関所で

チョイトまくり(待った)

若衆のものとは

受けとれぬ コチャ

新造じゃないかと一寸三島

コチャエー コチャエー

歴史的に言えば、「入鉄砲と出女」の取締りだ。参勤交代の大名は国へ帰るとき江戸へ奥方や姫を人質に残して置いた。この女性たちに男装の若衆姿で逃げ出されては、徳川幕府は困るので箱根の関所で厳重に取締った。籠のすだれをまくって、若衆ではない、新造(奥様)じゃないかと一寸見た(三島にかけ)という意味だ。

へ 酒も沼津(ノマズ)に原鼓

吉原の富士の山川

白酒を コチャ

姉さん出しかけ蒲原へ

コチャエー コチャエー

沼津(ノマズ)は土地の老人で

「ノマズ」と発音する人がある。ナ行の発音の変化の応用だ。富士の山川は富士山と富士川だ。白雪とその雪どけの水を白酒にたとえた。原は現在の原町、吉原は紙の街の吉原市、蒲原は今ではアルミニウムの街だ。

へ ぐちを由比だす 薩埵坂

馬鹿らしやからんだ口説を

興津川 コチャ

だまして寝かして恋の坂

コチャエー コチャエー

由比から先に新田と足利の古戦場、薩埵峠がある。大雨の時、土砂崩れで東海道線が止まる処だ。興津川を越すと、清水市興津町に入る。恋の坂が筆者には判らないが、清見寺の先にある旧井上公爵邸前の坂ではなかるうか。

へ 江尻突かれて 気は府中

はま鞠子ドラを宇津谷の

十団子 コチャ

岡部で笑わば笑わんせ

コチャエー コチャエー

お尻をつつかれ、気が夢中になる。江尻は現在の清水市、府中(駿府)は静岡市。鞠子は「とろろ汁」で有名。今でも丁字屋が残っている。

る。宇津の谷峠では、麻糸へ豆粒ほどの団子を十個づつ通した「十団子」を売っていた。

「十団子」は宇津の谷峠に現われて旅人を悩ました人喰鬼を、旅僧に姿を変えた地藏菩薩が法力で鬼を十粒の小玉にして飲み込んで退治したという伝説に由来する。岡部の宿は現在の岡部町。宇津の谷峠をもじって十団子でドラを打つとしたわけだ。お尻をつつかれ、

ポーッと成って、とろろ汁で精をつけ、ドラで囃されたらたまらな

い。

へ 藤枝娘の しおらしや

投げ島田 大井川いと

抱きしめて コチャ

いやでもおうでも金谷せぬ

コチャエー コチャエー

藤枝は藤枝市、島田は島田市で島田藩の発祥地。金谷はお茶の金谷町。大井川いと、大いに可愛いと抱きしめたことで、こんなに愛されては娘の島田藩もこわれ、かなわ(金谷)ないことだろう。

へ 小夜の中山 夜泣石

日坂の名物 わらびの

餅を焼く コチャ

喰うて急いで掛川へ

小夜の中山には今でも夜泣石が祭つてある。昔、日坂の女が金谷に住む夫を訪ねてゆく途中賊に殺されたが、お腹の子供は救われて、子育館で育てられた。殺された女の霊が傍の石に乗り移り、毎夜泣くので夜泣石と名づけた。弘法大師の法力で泣き声は止まり、子供は成人して母親の仇討をした…日坂は、

わらび餅が名物だった。喰べてから急いで、掛川市へ向ったのだ。

へ 袋井通りで 見付られ

浜松の 木蔭で 舞坂

まくりあげ コチャ

渡しに乗るのが荒井宿

コチャエー コチャエー

袋井から見付の宿場になる。袋井は袋井市、見付は磐田市だ。浜松を通り舞坂から浜名湖を船で荒井へ渡る。今の新居だ。ここにも箱根と同じような関所があった。「改め婆」という女役人？がいて裾をまくったり、オッパイをさわったりして女ではないかと調べたのだ。浜松の木蔭で舞坂まくりあげ…は、その描写を巧みにカモフラージュしたものと思われる。

へお前と白須賀 二川の

吉田屋の二階の隅み

で初の御油 コチャ

お顔は赤坂藤川へ

コチャエー コチャエー

白須賀、二川は俺とお前とは知

らない二人だが、吉田屋の二階の隅で初めて会って、恥かしくて顔が赤くなったというシャレだ。二川は現在、豊橋市に合併。吉田は「吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振り袖が」と、唄われた有名な宿場。今では豊橋市の中心部に当る。御油は弥次喜多が、とめ女に引張られたところ、赤坂も遊女で名高く、藤川は小休みの宿場だった。

へ岡崎女部衆の 珍池鯉鮒
よく揃らい鳴海紋り着て
宮の浜(舟) コチャ
焼蛤など 一寸 桑名
コチャエー コチャエー

池鯉鮒は今の知立町。チンチリンという語感をもたせて珍池鯉鮒と唄った。鳴海は紋りの産地だ。今では名古屋市緑区鳴海町だ。宮の宿は名古屋市熱田区伝馬町あたり、ここから海上七里、桑名へ船

で渡った。民謡「桑名の殿様」にある時雨蛤や焼蛤は桑名の名物。桑名は「喰はな」にかけてある。

へ四日市より 石薬師

願をかけ 庄野の悪さを直さんと コチャ

亀山薬師を 伏しおがむ

コチャエー コチャエー

四日市を過ぎると石薬師だ。弘法大師が奇石に薬師如来を彫刻して安置した石薬師寺がある。庄野は関西本線加佐登駅の近くに取残されたように生きている。庄野の悪さとは、「性が悪いという」性質(心)の悪いこと直そうと、お薬師様に願をかけて拜がんだという意味だ。

へ互いに手を取り 急ぐ旅

ここ関 坂の下から

見えぐれば コチャ

土山つつじで 日を暮す

コチャエー コチャエー

関の宿場を心がせく(急ぐ)と唄い、坂の下の宿場は鈴鹿峠の下にあるからこの地名が生れた。峠を控えて足を休める旅人も多く、近くの岩根山に咲く岩つつじの春の眺めが良かったので、次の宿場

土山のつつじとかけたのだろう。

へ水口びるに 紅をつけ

玉揃い どんな石部の

お方でも コチャ

色には迷うて ぐにやんぐと

コチャエー コチャエー

水口と石部の宿場を巧みに唄い

こんだ傑作だ。皆、唇に紅をさした美人が揃っていては、いかに堅物の石部金吉さんでも、色香に迷ってグニャグニャになることだろう。水口は甲賀流忍者の発祥地。

へお前と私は 草津縁

ぼちゃぼちゃと 夜毎に

ついたる 姥ヶ餅 コチャ

矢走の天津で 都入り

コチャエー コチャエー

小さなあん餅に砂糖をふりかけた姥ヶ餅は草津の名物だ。矢走は大津へ船で渡るための琵琶湖畔の矢橋だ。「右やはせ道これより廿五丁 大津へ船わたし」と道しるべに刻んである。

最後にこの一節は意味深長だ。

上品に唄われているが、よく考えてごらん下さい。

草津で結ばれた二人が夜ごとに餅をつく。女性はポチャポチャの

餅肌だ。矢が走るような勢で都に入る。目的を達する。目出度し目出度しだ。

以上十八節の歌は単に地名や地形、名物、名所を語呂や語感に合せて、シャレで作ったものと、箱根の如く歴史的な事実を唄ったもの、旅行の実際の様子を唄ったもの、名古屋は宮の渡しになっている。

北京だより

福原 享一 (67回)

北京の東、百五十キロばかりの唐山地方にマグニチュード七・五の大地震が起き、十万人もの人が死んだといわれていますから、北京にもいろいろな影響がありました。幸い、私と家族は少しもこわい目にあわずにすみましたし、安全な場所から眺めていると、こういう予想外の事件のときに、中国人がどんな振舞いをするのか、ふだんにはうかがえない表情を見ることができ、得難い経験だったと思っています。

実は地震の当時、私は北京を離れて旅行中でした。都立秋川高校(全寮制)に在学中の長男が夏休みで帰省?してきた機会に、長春から瀋陽、大連を参観する家族旅行を計画し、夜行列車で唐山を通り過ぎた六時間後に、大地震が発生したというわけです。仮にコースを逆にとつてまず大連へ行く計画を選んでいたら、ちょうど列車は現場で地震に遭遇し、救援隊がかつけけるまで二日夜の悪戦苦闘ぶりを生々しくルポルターージュすることができたのですが……

結局、その日の朝は、八時すぎに長春に着いて、なにも知らないまま、有名な自動車工場などを見学、夜ホテルで映画を見ているときに、かなり大きな余震がありました。一緒に見ていたアメリカ人のグループや華僑たちも驚きましたが、大した騒ぎにならなかったところを見ると、私達同様、その

日の朝唐山地震のことは知らなかつたようです。あとで、別のホテルに泊っていたF君から電話があり、地震で北京も東京も騒いでいることを教えてくれました。あわてて北京の同僚I君に電話してみると、「かなり大きな地震で中国人や外人は大騒ぎだったが、もうおさまったから旅行を続けて結構だ」とのことでした。

地震の影響が出始めたのは翌日で、旅行社の案内人が深刻な顔でやって来て、北京へ通じる鉄道が止まり、列車による旅行は出来なくなつたから、とりあえず次の目的地瀋陽まで飛行機で行つてほしいといいました。

次の日、沈陽空港につくとターミナルの周辺には多数の救急車、バスや白衣の職員が待機してものものしい空気。現地から空輸される負傷者を付近の病院へ収容しているという説明です。北京との電話も容易につながらず、東京と連絡した結果、北京に新しい避難指令が出て異常な状態というので、家族は旅行を続け、私だけ臨時便の切符を手に入れてもらつて、三十一日深夜の北京空港に戻りました。

この夏、北京の市民は約三週間にわたつて公園や路傍でニワカ作

りのテント生活を続けたわけですが、私は大使館で記者仲間とザコ寝の合宿。中国の外交も貿易もストップしてしまつたので、仕事はすっかりヒマになり、もっぱら小説を読んで時間をつぶしました。日本人からみると、家が無事に残っているのに警戒してじつと不衛生なテント生活を続けるなど、とても我慢できないように思うのですが、中国人が落着き払つて、路傍の暮しを続けるさまに感心しました。

実際は決して悠々としていたのではなく、生まれて始めて経験したらしい地震がこわくてたまらなかつたのかもしれない。幸い、夏でしたから、いつもの夕涼みの習慣の延長のような気持で抵抗が少かつたかもしれません。ベットが普及していませんから、これを持ち出してしまえば比較的簡単に暮らしたのさマになるといえます。また東京と違って道路幅が広く、歩道にたつぷり木蔭がある所が多いのも救いでした。そして、なによりもヤミや投機で物価がつり上がるような心配がない社会の仕組み、あるいは政治への信頼感が大きく物をいっているという点も否定できないでしょう。

しかし、それらをひっくりかえす

基礎に、なにか骨太い、民族的なものがあるように思えてなりません。専門家が余震の心配があるといい、現に唐山で余震があると知れば納得してじつと我慢する。九月に入つても小中学校では校舎の基礎に、二階以上を使用させず、教室の足らない分は屋外授業を続けていますが、生徒も父兄も文句をいわない。危険ならば、それを防ぐために努力し、ギセイを払うのは当然だ。——これこそ二千年前には万里の長城を築き、現代ではソ連の攻撃を予想して全国に地下壕を掘り進めていた民族の本能のようなものではないかと思えるのです。

		東 方		西 方		方言太郎 作	
横網	ごせつぽい	前頭	はだつて	横網	やつきり	前頭	ばんたび
大関	そうずら	同	ぶそる	大関	おまっち	同	ひやつこい
関脇	いかずに	同	せんころ	関脇	いかすか	同	ぞんぐり
小結	おぞい	同	ぬくとい	小結	おとましい	同	ちよつくら
前頭	ひどろしい	同	ぶしょつたい	前頭	やぶせつたい	同	しよんない
行司	かんだるい	検査役	そのいとに	取締	おおぼつたい	勸進元	ぼつたてる
		同	ええかん			同	かまう
		同	しよろしよ			同	みるい
		同	たんだ			同	ぶつさらう
		同	なりき			同	あらすか
							ちんびい

提供 青木静男(59回)

各 期 便 り

四六回

東京に於ける四十六期会は、この三、四年間集ったことがありませんでした。今年是非とも一堂



に会して、肩をたたき合い、懐古談に花を咲かせ、健康を祝したいと計画して行きました。去る六月第二回の関東支部総会に顔を合せた青木、岩崎、内山、大藤、阿部の

五名が打合せた結果、九月十四日池袋で本当に久しぶりのクラス会を開くことが出来ました。会場の料亭「はにわ」は青木君のお世話によるもの。会合のお知らせ、宛名書き、発送等々全部を同君の秘書栗原さんにおんぶ。やれやれ。出席者は写真の通り十二名、前列右から青木、土方、大藤、河村、磯塚、後列右から阿部、田中、内山、鼠入

岩崎、山沢、一宮諸君。静中卒業以来四十数年間、一度も会った事のない人のために念の為御紹介しておきます。当日までに報告をうけた会員のお便りは次の通り。佐藤公一君。退官後明治大学農学部で若人を相手に元気でやっている由。

繁田 幹君。東京のクラス会には是非とも静岡代表で出席の約束でしたが、当日はたまたま敬老会の世話役のため出席出来ず、盛会を祈ると共に皆様に宜しくお伝え下さいとの事。(阿部俊一)

四七回

久留 武君。先般山本敬三郎知事と会食されたとか。この次は是非出席して昔話を語りたい。皆さんの顔が想い出せないとの話。八木鎮司君。先日来腕の筋を違えて、この痛みで連日不快。残念だが今回は欠席、次回に譲る。御盛會を祈る。

今年も亦47回の同窓会の季節となった。去る10月2日/3日「江の島」35回永野先輩経営の「恵比寿屋」の一夜。参集した者計30名下記のとおり。

篠原 清君。都合つきかねて残念皆さんによろしく。長浜謙二君。昨年来高血圧に悩まされ、仕事より身体を思い、休養中、諸兄によろしく。大須純一君。止むを得ぬ所用で欠席、皆さんによろしく。弊方頗る元氣との由。目崎初美君。地域農業計画に関する業務を中心に技術士事務所を開設しているとの事。井雲晴秀君。当日都合がつかず欠席、皆々様の健康を祈る。丸杉孝之助君。お知らせを受けた日は東京だが、その翌日沖繩へ帰任。琉球大熱帯植物研で先生。

誠に有難いこと、関西、静岡、関東から恩師実に7名。カクシヤクとした70才〜80才〜90才の師とようやく還暦を越えた我々を見比べて、宿の女中の曰ク「余りお歳の違いが無いようですね」と。会は鳴谷博士の「百才を生きるには」で始まる。「酒と煙草」をたしなむ奴は到底駄目。但し酒は晩酌二合以下位ならよいが、煙草は百害あって一利なし話術たくみな養生訓。この間約一時間。参会者一同。いさかかしんみりしたがいざ酒がまわり、時が経つにつれて尊いお話しもいつしか彼岸。懐旧談に、第二の人生の活躍談義、欠席した友の消息に、話題ははずむ。ロッキード、ミグも着になったであろう。心は肉体の老を忘れて青春に帰り、秋の夜の更けるを知らず。目下病床にある森川、海野(英)松島の三君に見舞電報をうつ。宴半ば森川からの電話に、又恩師大野先生からの祝電に一同感激。翌朝、夜来の風雨も止み、青空がのぞく。釣に出かける早出組、徹夜麻雀に未だ白川夜舟の一群、昨夜の酒もケロリと醒めて朝酒に亦歓談の老童連。47回益々意気盛んと言ふべし。

四八回

当日の出席者(順不同敬称略) 佐藤、小沢、本告、望月、西田、直井、広田(以上恩師)。秋口、酒井、柴、草ヶ谷、後藤、川村、原田、鈴木(森)、鳴谷、杉江、杉山、市川、小山、石上、久永、亀山(敏)、中村、石川(一ノ宮)高橋、志田、大村、山本、薬科、松永(強)、山崎、佐津川、野口、山上、山村、吉見、片山、今関、(今関智吉) 静中四十八回関東支部世話人会を九月二十四日、福永君の御世話で有楽町の日本倶楽部で行いました。参加者は河村祥、大橋広世、原崎進一、福永正美、松岡喜郎、の諸君と小生の六人で、他に加藤博、日比野悦三君は参加予定でし

たが、所用の為不参加になりました。大体に以上の人達が何かありますと集ってはお互に連絡を探り合うことをやっております。

思いますに桜の花の咲き、そして散って行く頃中学の校門に一步を印し一步を残して卒業してから四十八年の歳月が過ぎて行つたわけで、同窓の諸君夫々還暦を迎え終えた人違ばかりとなつたわけです。お互に長い年月を経た人達ばかりで、集まれば皆昔に還り往時の想い出に花を咲かせています。ほんとうに利益を忘れた一時であり、しみじみした味の深い歓談に終始し、時の過ぎるのを忘れてしまします。

こうした集いに数多くの人達が集つてこそほんとうに中学時代は良き時代だったなあと思うことがしばしばです。

私達四十八回の同窓会は静岡と関東の人達が主となつて年二回、夫々廻り持ちで集つています。今回は十一月二十日に静岡で開かれることになっております。一人でも多く集つて昔の苦楽のことどもなど話し合い度いと心から思っております。(寺尾睦之助)

四九回

会報原稿作成の前に一度集會を

持つ予定であつたが、幹事の不行届き並に各人の多忙の為実現出来なかつたので、手許の情報にもとづき各人の近況断片を御報告致します。

昭和九年の卒業ですから、六十年前後の年令層となり、広い意味での宮仕えをした者も、第二の人生、又は職場に夫々おさまり、元気に活躍している模様ですし、自由業又は学者、自営者、会社々長等々仲々に多士さいさいで、大正ひとけたの世代の代表的顔ぶれを以て自任するむきも多い様です。新聞紙上でその動向が発表されるいすず自動車副社長の上杉あたりは大方の御存知の処、三井アルミの浦野、福岡パッキンの大津、電測工業社長の小林、元日本工学の嶋、白青警備の菅沼、その他、曾根、谷、矢崎、杉山(園)、江山等々実業界の第一線で活躍中、大学教授では鈴木鑑、山村あり、停退後メカネ小売商を京王線下高井戸駅前で開いている杉本、その他の方々も一々名前をあげたいが、紙面の都合で省略させて頂くが、悠々自適の方も含め、昭和元録か平和万才の時代か、良く解りませんが、あの苛烈な戦中戦後の体験を経て、今日尚大地に根を張つて、たくましく生きている方々ばかり

の様であります。「案外みんな死なないで生きてるな」と言うのが、久しぶりに顔を合わせた時の感がいです。

処で野崎巖は和歌山に移住して東山と姓が変わっていたが、来年三月上旬、フジカラーの応援で京橋のフォトギャラリーで、ヨーロッパの写真の個展を開催する由、従つて案内状を送るから枚数を知らせる様にとの便りがあつたので予告しておきます。

又、当期の東京での中心になるのは、足場の良い西新橋の日本石油ビル地下街の東京ファーマシー社長江山がいる。商売繁じょうで多忙の様であるが、同窓会情報に一番精しい人です。

今後は更に連絡を密に行きたいと念願しております。御協力を御願いたします。(菅沼 栄)

五一回

中学を卒業して丁度40年になる。不思議なことに少年時代の想い出というのは何時までも薄れない。事柄によっては益々印象が強くなる何故だろうか。多分若い脳細胞に刻み込まれ、しかも古いことほど何度も想い出してみる。つまり頭脳コンピューターのメモリからデータを一引張り出しては

意識し、それを再びメモリーに記憶し直すことを繰返す。その度数が多い程、印象として強くなる。想い出すことの中で最も頻度の多いのが運動会の終りに行われる攻城戦だ。その想い出は静中へ入学する前の小学生時代にさかのぼる。折り襟を着た小学生があこがれの静中の運動会を物珍しそうに見にゆく。あの中にまじつてみたいと思う。そのうち運動会も終りに近くなつてドンドンバチバチという音に、何が始まつたかと思う。気がついてみるとグラウンドの東の端に立派なお城が突如としてそびえる。紅軍白軍が銃撃戦を展開する。そのうち攻撃軍が城近くに迫ると、城にバツと火の手があがる。煙幕と火焰が空一杯にひるがる頃、突撃ラッパがなり落城する。数年して自分が中学生となつて渦中に入った時、また新たな印象を与えられた。何度繰返してみても何となしに胸おどる思いをした。終戦前に静中に学んだ者なら攻城戦のことをおそらく一生忘れることはないと思う。

話は変わるが、私達のクラスに最近新聞・テレビの話題になつた者がいる。過日、北海道の長沼裁判で有名になつた札幌高裁判事、小河八十次君がその人だ。彼の名は

報道では「オゴウヤソツグ」となつていたが、我々仲間では「オガワソツジ」で通つていた。報道された名前の方が偉そうにいい。彼と机を並べた印象からすると、心身共に頑強で粘り強く、何事も理屈から入るタイプの方だ。

長沼裁判の報道のとき新聞に出た写真を見ると、長身で肩巾が広く眼鏡をかけた姿は全体として中学生時代とあまり変りなく頼母しく思った。判決内容は専門外なのでよく分らないが、彼らしい、堅実一本で出した結論ではないかと思う。

静岡にも毎月用事があり出張する。時々ひまを盗んで賤機山に登つてみる。こんなに思まれた自然環境で過した少年時代は幸せだつたとつくづく思う。(原崎郁平)

五二回

私たちの同期会は、毎年一回地元静岡で浮月か三笑亭に恩師をお招きして中学時代の昔にかえり肩をたたき合う。この例会には東京方面からはもとより遠く北海道や姫路、明石あたりからも馳せ参じていつも盛会である。また、夕方からはじまるこの例会に先んじて行なわれる同期会のゴルフコンペも楽しい。たいいてい

島田か浜岡のコースだが、牧のが原の茶畑の真中に広がる島田コースも御前崎海岸をはるかに望む浜岡コースもともに素晴らしい。この同期会ゴルフを昭和十二年三月卒業という意味で一二三(ひふみ)会と名付けている。優勝者の顔ぶれは毎年のようにかわるが、ベスグロはいつも坂本(トビー工業)か仁科(大興化学)である。他の連中は(私も含めて)少々腑甲斐ない次第だが、ベスグロ候補は実は、もう一人いることになっている。それは野球できた腕っぶりでロングドライブを飛ばす川島(本田技研)である、彼は仕事熱心でついぞこのゴルフ会に顔をみせたことがない幻のベスグロ候補である。一二三会もすでに今年で一七回、今年は綾部(安藤建設)と直原(泰生商会)が同ネット優勝をわけた。

さて、私たちが間もなく還暦を迎えるという年代になった。同期生のどの顔をみても紅顔の美少年はいまや白髪であり、それぞれ一様に老けてしまった。しかし、その顔の中には、ちゃんと中学時代の童顔がそのまま残っている。同期生の顔の中にこの悪戯っぽい中学生時代の顔を発見することは、実に楽しいものであり郷愁にから

れる。そういえば、会報創刊号の表紙の木造建物の旧校舎の写真はなつかしく感慨ひとしおであり、桜の散る校門をくぐってこの木造の旧校舎へ通った四〇年前の中学生時代の記憶が鮮やかによみがえる。(曾根信一)

五四回

五四回は静岡五四季会本部で八月に百年祭を記念して「思い出の記」と銘うって同期生の文集を出した。出品は二十名足らずであったが、掲載されたものは、いずれもが四十年前を彷彿たらしめるものばかりであった。

私も「先生友人そして自分」と題して一〇枚程書かせてもらったが、文中に登場してくる友人十数人のうち、物故者が六人も居たのには驚ろいた。

入学した時、たしか二百余人であったが、卒業の時は一八〇人程に減っていた。現在の五四季会の名簿は住所不明の一〇人を入れて一三五人だから五〇人程が亡くなったことになる。故人の留守宅も分っている限り掲載してほしいものだ。何かの機会に訪問して故人の霊を慰めることもあるだろう。こんなことを書くのも五十過ぎの感傷かもしれない。

第二回東京大会では、静岡から鈴木春雄幹事、高橋孝三同窓会副会長、永原稔、望月逸夫の四君が参加、東京から大畑忠夫、柴田久夫(旧姓今井)、下山西四郎、山口道也、山田幸作の五君と私が出席し、会后、日劇前ニュートキョーで二次会に移ったが、興高まるや、望月キンギョが銀座にある馴染みのクラブへ御案内というこ

五六回

(庵原栄次)

大正十二年関東大震災の洗礼を受けこの世に誕生した輩が我が五十六回生であり、所謂生まれながらの地震っ子というべきか。最近静岡を中心とする直下型大地震とやら誠に物騒な記事が新聞紙上を賑わしているが、地震っ子ならずとも、静岡を故郷とする我々同窓生には誠におだやかならざる心境である。

というのも昭和十五年(静岡四十年生時)静岡大火、昭和二十年大東亜戦争空襲による大火を続けて二度の災害のため、故郷静岡は全く焦土と化した悲しい体験があるからである。故郷を離れている我々の臉に今

以て浮かぶのは、やはり当時の校舎であり、共に歩いた街並だが、今はそれもすっかり変り昔日の姿はない。あれから三十数年、大東亜戦争に参加、数多くの戦死者戦没者を出し、その後病死された友も多いが、それだけに残った我々は友情のきづなを大切にもっと強くする必要があるのでないか。

現在五十六回(関東支部)生は連絡のとれているもの三十七名(転勤で四名減)メンバーは、金融関係大庭(日本信託)中村(日本輸入銀行)八百(開発銀行)橋本(安田火災)学者には北村(東京外語)三枝(筑波大)その他各界に互り多士済々である。

今年度五十六回関東支部クラス会は十一月十七日日本輸出入銀行青山寮で開催すべく中村君と準備中。猶前回は紹介した同期の原田昇左右君(衆議院議員候補元運輸省)の出番も愈々接近、絶大なる御支援を賜る様紙上をかりて御願致します。(奥野進)

六〇回

先日、静岡中高百年史の編纂室から60期の資料集めに協力して欲しいとの連絡があった。

指定の日曜日に静岡を訪問すると同期の見城、杉本(ガス)、遠

山の諸兄のほかに昭和20年当時動員で三菱発動機工場に行っていた、工員の班長だった増田さんという方がいた。編集担当の中村羊一郎先生が中心になってあの勤労動員時代の記憶を求めた。私にとっては懐しくはあるが、その後の激しい時代の変遷に記憶の大半が薄れて当時のことを思い出せなかった。

遠山、見城、杉本の諸氏はその後の三十年間を静岡にいただけに驚くほどの新鮮な記憶で多くを語ってくれた。その中の二、三を紹介すると……

①昭和十九年、動員の初めの日作曲金の軍神社に集合して訓示をうけてから工場に入った。当分の日程は変らなかつたが、夜勤制が加わってから直接工場に出勤し、後に三交代制で深夜勤務もした。②昭和十九年の十二月から工場に米軍機の爆弾投下があり、四月に工場が全焼した。60回生は二十年三月二十八日の午前八時から卒業式を静岡中の講堂で行ない、その日の午後は再び工場に出勤した。それから四月以降も一部の人は工場に通った。これは合格した進学校が焼けたりしたため、当分出身校の動員先に勤務したものだという。

③当時の先生方が書いた動員日誌が奇跡的にも発見され静高に保管されている。この日誌の筆者は諏訪（現副知事）三浦（現校長）望月の諸先生方で、誰が事故を起こしたとか欠席した早退したなどが記されている。この中で、われわれが食堂に集まらなくて先生方が大変困惑したことが毎日のように記入されていた。また二十年二月に入ると受験のため誰れが欠席という記事が目立ち、上杉氏や皆さんの名前が一人一人記入されている。

以上のように60回卒業の人たちの資料がいちばん不足しているというので、これをお読みの方はお持ちになっている当時の写真、資料や思い出すことを左記のところに送って戴きたい。時間は十分あります。

一〇四 静岡市長谷町六六

静岡中静高百年史編纂委員会

委員 中村羊一郎先生宛

さて、東京にいたので静岡のことも余り知らないが、磯谷氏（静岡機械製作所社長）の山崎新田の自宅に毎月十五日、有志が集まって懇親の夜をすごしている。磯谷氏は今、在学当時は想像もできないほど変わったことをしている。というのは、ヨーロッパの古

い教会からパイプ・オルガンの材料を購入し、自宅の一室をこの演奏室（二十畳ぐらい）に改装して独り楽しんでゐる。勿論、懇親の夜はこの部屋が開放される。今月も秋の夜長を当時の学友、今の白髪やハゲが集って、世界を日本を静岡を、そして昔の友を語り合っていることであろう。住所は静岡市山崎新田、磯谷恵一氏で電話帳を調べ、ぜひ音信を願いたい。

話は変わるが、この暮には久し振りの総選挙がある。静岡一区では永原稔（前副知事）など静岡出身の三氏が出馬、これに静岡出身の佐野嘉吉（前自民党県連幹事長）が対抗、静中―静岡戦にもなる。郷土の衆院選がこんな形になるのは初めて。（水上元一郎）

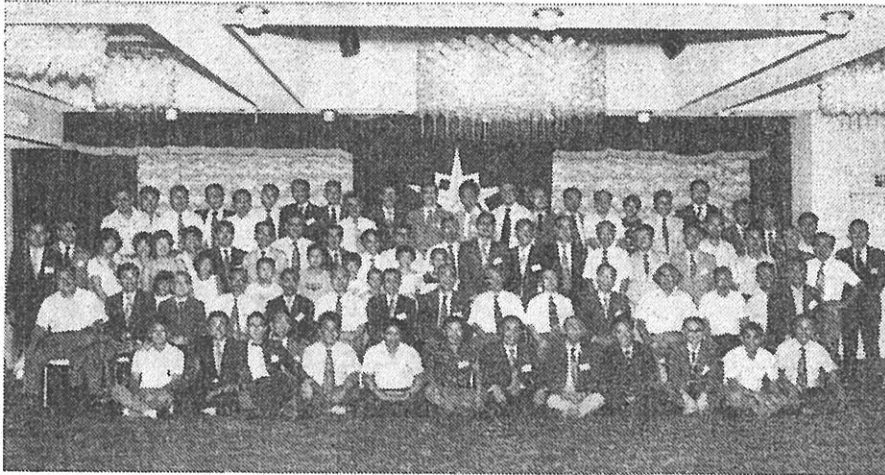
六七回

東京で67会をやるときは静岡から、静岡でやるときは東京から必ず何人かが行ったり来たりして交流を深めている。さる八月二十一日に静岡の中島屋で開かれた67会にも、東京から幹事役の朝比奈正三、成岡英彦、梶原由三君はじめ数人が参加した。

当日の会合には三浦朝治（現静高校長）、式守富二、北川巻平、渡辺福太郎、大村政夫、本田慶直、

村上春水、湯沢肇、鈴木巖の諸先生、同窓会を代表して鈴木与平会長、それに東京大阪からかけつけた諸君を含めて約七十人の級友が集まった。

特に今年、初めての立食パーティー形式で、家族の参加を歓迎したため、数人の奥さんや子ども



盛大な67会 当日の出席者一同
8・22 静岡中島屋グランドホテル

たちも顔をみせ、いつにないなごやかな会となった。これからますます家族ぐるみのつきあいが深まっていくだろうから、ときにはこいう試みもいいのではないだろうか。

それに静岡の増田智一、吉沢清治、光木徹君らの努力で、67会新聞が当日配られた。大変いい出来ばえで多くの諸君の消息などもわかり、よかったと思う。近く第二号が発刊されるはずである。

十月三日にはまた恒例の67会の第15回ゴルフコンペが藤枝カントリークラブで行なわれ、二十一人が参加した。前回優勝の溝口淑郎君とたまたま帰静中の大石が東京から顔を出し、過去十数回になかった大熱戦がくりひろげられた。

その夜、数人の仲間が一杯やりながら、次回あたりには伊豆で土曜一泊のコンペをやらう、そうすれば懇親をかねて東京などからも、もっと参加者がふえるだろうという話になった。（大石修而）

六八回

第一回の女子卒業生は全員で八名でした。

城内の古校舎でしたが、片田先生御丹誠のすばらしい芙蓉、葵、コスモスなど四季の花がいつも咲きみだれる中で、多数の男子の注目をあびながら、多感な青春時代を過しました。

ニキビ花盛りの男子の中で、たった一人で受ける授業の心細かったこと、悪童達の悪口に平静をよそおいながらも、内心は恥しくてたまらなかつたこと、修学旅行で兄のカメラを盗まれて泣いてしまったことなど次から次へと走馬灯のように浮んできます。しかし、なんといいっても稀少価値でしたから、やさしくしてくれる男子が多く、今にして思えば、楽しい学校生活でした。欲をいえば、甘いロマンスがなく卒業したことが心残りです。

魅力の少かつた私達も、番茶も出花のころには、それぞれ恋愛や見合などで結婚しまして、二十数年後の現在は東京に四名、静岡に三名、鳥取一名と、それぞれ小学生から大学生の二、三人の母親になり、育児に夢中なひと、受験生をかかえている人、国立に入れて

頑張っているひと、私立に入れて受験戦争を逃げだした人、いろいろです。在京の四名は、たまに日本橋の「ざくろ」へ集って受験戦争の悩みあきらめなどのオンシャベリ会をやっております。

卒業後も甲子園の野球、あこがれの男性にお会いできる同級会、同窓会、立派に御活躍されているの誇りや喜びなど、平凡な主婦になつて私達にとって、いつまでも楽しみを与えてくれる静高を卒業できた幸運を心から喜んでおります。

釣、ゴルフの次には女性も参加しやすいハイキングとかフィールド・アスレチック等も計画していただけると、青春時代にもどって楽しいひとときが過せるのではないかと、女性共で話合っていますので、幹事さん、よろしく願います。(荒谷じつ子)

七九回

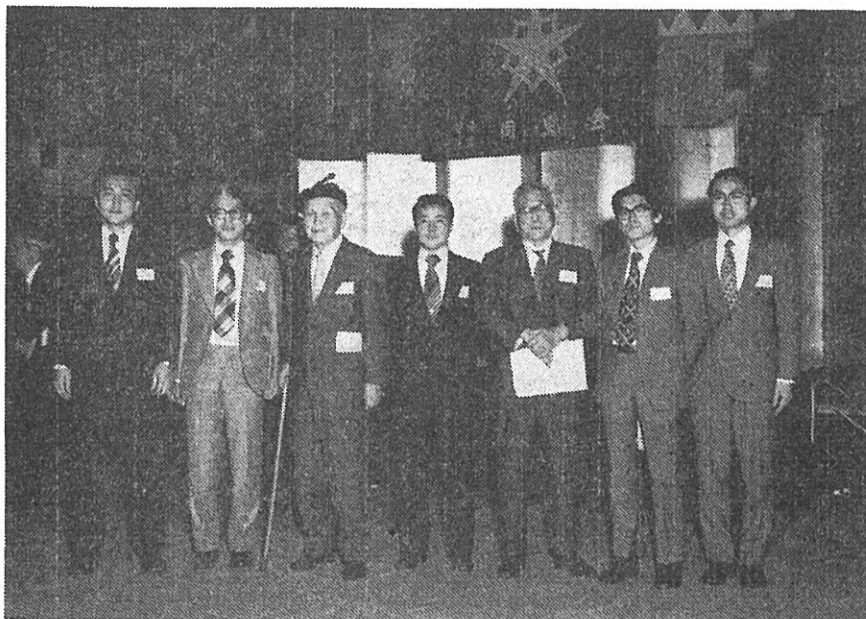
昨夜、「ミス日本」の女の子を知っているかと友人からの電話。静高出身で現在、東大医学部三年生、そして山本富士子二世といわれているとのこと。さっそく週刊朝日を買って求め、なんとなく嬉しくなっている自分を見て、そんな

程度しか母校との結びつきがないのかなと考えつつ、今原稿を書いています。

高三のとき四組の担任で英語を教えていただいた小泉保先生(現静岡女子大学教授)が岩波文庫からフィンランドの民俗叙事詩「カレワラ」上下を出版なさいます。我々が卒業してから先生はフ

インランドへ留学をなされ数少ないフィンランド語の研究者として御活躍中です。御購読のほどを。

江川君と七九期の幹事をやらせていただいています。まだ一度も同期の集りを持ちえませんが、申しわけなく思っております。なんの情報でも結構です。御連絡をお待ちしております。(上田尚亮)



同期の便りが間にあいませんので、第二回総会の時に、二先輩を囲んで写した写真をもつてかえさせていただきます。右より竹内尚興、谷村宏、土屋先輩(26)、宮崎太加志、池田先輩(23)、増田和美、高山貞和 (81回)

兄さんち

過日、同窓幹事会の席上で、私は遠縁にあたる来春高卒見込の女の子の就職依頼の話をした。多少飲んでいたいせいは言え、公の席で私事を、しかも就職などという重大なことをいとも安直に口にした軽卒さは今思うと冷汗が出る。にもかかわらず、全く文字通り即座に手を上げて立候補してくれた先輩がいた。岩波顧問である。

同席していた柳川副会長も「すぐに候補者が出てよかったナ」と帰りぎわに声をかけてくれた。かえってこれが私に事の重大さを忘れさせたのかも知れない。翌日は宮沢会長の会社の演奏会に招かれた。こともあろうに今度は会長自ら「ゆうべのお嬢さん、私のところでもよかったら」という。私にも甘えがあった。会長のところの入社試験には見事に落第した。

うのだ。たとえ後輩の同窓生とはいえ支部がつくられたというだけで、たかが一年ほどまえから知りあったにすぎない私のために、一体これはどういう言葉であろう。遠まわりをしながら結局は第一声をあげてくれた岩波顧問の会社に世話になることになった。しかも何んと先輩は、そんなこともあろうかと先約の志望者を一人保留しておいてくれたのだという。こんな我ままをゆるすかさねがさねの兄さんちの愛情に私は返す言葉がない。同期の支部・中央連絡世話人会の席でこの話を披露したら関東支部の美談だと拍手された。自分の方がかたづいたからと、言えた義理ではないが、同窓会は就職斡旋の場でもあるまい。前例となつて互に負担になるようなことはこれからしまい。

私は釣をやったことがないが、計画したのなら参加が一人でも多いのが主催者のはりあいかと、雨の鯉釣り大会ににかけて行った。私はカトリックの司祭であり、人の魂を漁るのには馴れているが、ほんとうの魚はむつかしい。そして、今度ばかりは先輩たちの優しさに私の心が完全に漁られた。生れてはじめて独力で一匹釣った。「君に釣られるような魚はよほど

まぬけだ」と奥野副会長は冷やかにしながらもニコニコした。今度の先輩たちの好意がこの一匹に凝縮されているような気がして私にとってはは大漁だった。溪谷の雨も心して美しい鱒釣り大会であった。

いころう

(59回青木静男)

キリスト者の中にもこのような話は少ない。やっぱり静高の衆らは好いなアと思う。その同窓会に報いる意味でも、まかされたこの会報の編集を手つだい続けたい。

鱒釣り

関東支部が結成されて二年目を迎えました、顔を合せる機会が

少ない。懇親の場をより多く設けようとの試みから去る十月二十四日、丹沢の景勝地早戸川で鱒釣り大会を企画しました。



当日は生憎雨。何人の参加を得られるかと幹事一同現地でもやきもきしていた処、集合時間真つ先に柳川先輩(四十二期)が奥様お孫さん八名を引きつれて登場、新宿よりのマイクロバスも十七名を乗せ無事到着、四十三名の参加を得る事が出来ました。

現地は中津川の支流が丹沢山系の北部奥く

刻み込んだ溪谷で、既に紅葉もチラホラ霧の間に見えて良い眺めでした。

釣場は、山奥にしては広い河原の川を段々に堰止めて区切り養殖鱒を放流してある訳です。

早速釣り方始め。黄金賞の金色の鱒を含む貸切り釣場の各処で釣れた釣れたの声。雄鱒が多い為か御婦人お子さんの方の腕が良いようで男性は専らはずし役。昼食は奥野先輩(五十三期)の御厚意で河原にテントを張り緋毛氈を敷いてバーベキューで一ばい。楽しい一日を満喫し、午後三時半各自数十四のおみやげを持って解散しました。

又次回御家族づれでの楽しい企画を樹てて参り度いと思えますので、よろしくお願い致します。

(67回幹事)

「おしゃべり」

二時間半の車中、久し振りに会う同窓生の事、女性は何論だがオヂサン達も話に花を咲かせた。

男性諸氏は釣り談議から故郷静岡の昔話と居る中にA先生から黒ハンベンの話が飛出した。

之が皮切りとなって、屋台の「にえきり」、玉葱やジャガ芋のフライに青海苔やダシ粉を付けて食う味、駄菓子屋の塩ゆでジャガ芋やおいらん芋、さては「静岡の親子丼は東京風の汁かけ飯みたいなの

とは訳が違う」に及び、終に来年の総会には故郷の味パーティを是非という結論となった。

女性軍は専ら亭主操縦術から男性心理学と高級な話題(中には家事サボリ術の御自慢等も！)。

第一回

ゴルフ大会

優勝 調子達郎氏(70回)

去る10月21日、関東支部として始めての試みである親善ゴルフ大会が伊豆大仁カントリ

ークラブで宮沢会長以下30名が参加して行われた。

当日は前日の豪雨のかけらも見かけられないほど雲なく風もない澄みきった秋晴れで、絶好のゴルフ日和であった。

このゴルフ場は新設のコースながら、フェアウェイ・グリーンとも非常によく整備されているし、谷越え、打ち上げ等変化にも富んでいて、なかなか面白いコースである。



ある場所では正面に、ある場所では背面にある富士山の姿がゴルフ場を色どる。

だが、雪化粧した秀峰富士にみとれると、ボールは打った本人の意志とは違って、谷間へサヨウナラしてしまうし、パットもはずし

一般的結論としては本日の会にはステキな男性多数を見込んでの御参加であったがチト期待外れ、魚影薄しとか。岳南賢女意気高しと申すべきか。脱帽敬礼。

(黄金魚記)

てしまおう。

しかし、日頃せわしない都会生活から解放されたからか、あるいは同窓生同志という家族的な雰囲気のおかげ、清澄な空気のもとで参加者が各ホール歓声をあげている。他のコンペなどにはみられない風景である。

試合後クラブハウスで表彰式と懇親会が行われた。宮沢会長杯、柳川杯を始め多くの方々より寄贈があった賞品が次々と授与され、そのたびに歓声があがる。結果は優勝・調子達郎氏(70回)、準優勝・花田守弘氏(72回)、第三位・宮代省一氏(70回)と各々男盛りの各氏が獲得した。

又、宮沢会長、柳川副会長、岩崎、岩波両顧問(いずれも42回)の長老クラスにブルービー賞やら敢斗賞が贈られたのは、ほほえましかった。

なお、この席上ゴルフ会の名称について討議されたが、多数をもって「仰高会(こうこうかい)」とすることに決め、次回は来年3月頃を予定することとし、今日出席の人達は勿論、都合で出席できなかった同窓生諸氏にもPRすることにした。

ラブの安田正弥氏(66回)に会場設営から費用に至るまで大変お世話になりましたし、準備段階から競技運営までなにくれとなく献身的なご尽力をいただいた奥野副会長(53回)67回の朝比奈正三氏、梶原由三氏、成岡英彦氏、70回の関哲男氏に、それぞれ心から厚くお礼申しあげます。

(67回雨宮明生)

その後の支部活動

四月二十七日 総会準備会
幹事二八名が集り、名簿原稿のまとめ、案内状配布等を行った。
五月二十八日 総会実行委員会
実行委員二〇名が集り、スケジュール、分担、プラスチックの諸方氏との打合せ等を行った。
六月三日 総会(別記)
七月八日 幹事会

幹事四三名が集り、事務局より総会報告、総会欠席者への名簿会報配布依頼、会報二号の計画説明があり、関東支部今後の運営、中堅若手ならびに女性会員への連絡呼び掛け方法、母校百年祭問題等を討議した。又67成岡氏より母校野球部の本年の状況及応援資金募金の説明があり、出席会員の応募で即日十五万円が集り、岳南健児

の心衰えずの感を深くした。

九月一七日 幹事会
幹事三八名が前回の如く集り、宮沢会長より、本部との調整に關し八月二四日の鈴木会長との会談経過報告があり、会報原稿依頼、ゴルフ及釣り大会の計画説明がありゴルフ部長に42岩崎氏が推された。又67桜井氏が静岡より参集し母校野球部の近況及先般の応援資金に対する謝辞が述べられた。

クラブ活動お知らせ

第2回ゴルフ大会
日時 昭和五十二年三月十七日(木曜日)
場所 東名カントリークラブ
会費 三〇〇〇円
(各自プレー費は別ですが特別料金で安くなります)

第1回麻雀大会

日時 昭和五十二年二月十九日(土曜日午後一時より)
場所 青山四丁目某麻雀荘の予定
会費 二〇〇〇円
(軽食及飲み物を準備します)

ゴルフ大会及麻雀大会の詳細は

編集後記

事前に各期幹事に連絡致しますが事務局の方に御問合せ御予約されても結構です。
奮って御参加下さい。
▽その他、新しい企画を是非御提案下さい。お待ち致して居ります。

年会費 二〇〇〇円

今年度(昭和五十一年四月より昭和五十二年三月迄)会費未納の方は是非事務局の方に御送り下さい。
静中静岡同窓会関東支部事務局
東京都台東区東上野二一八―七
(共同ビル十階)
株式会社 大雄内 奥野孝(53)
TEL 03―八三四―五三三一

此様にして編集に携って居ますと、私達の同窓生には各方面一流の方が揃って居り、会報を通じてその方々のお話を交流する事が出来る、これは実に素晴らしい事だと痛感もし、張り合いを感じます。皆様の御尽力に感謝し、会報の発展を期待して居ります。

(月見里記)

会報(第二号)

昭和51年12月10日 発行
編集人 月見里得知郎
発行所 静中静岡同窓会関東支部
印刷所 庵原印刷所

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮 沢 次 郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2 4 1 1 (大代表)

株式会社 講 談 社

取締役社長 野 間 省 一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945) 1 1 1 1 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2 1 1 1 (大代表)

株式会社 東 電 社

取締役社長 岩 波 信 平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2 7 0 1 (大代表)

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀 豪 三 (44回)

東京都中央区銀座6-2 合同ビル
TEL (571) 8 6 4 1 (大代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶 原 由 三 (67回)

東京都中央区銀座1-15-60
銀座NSビル4階
TEL 03-563-6 9 5 4 (代表)

建築設計・管理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成 岡 英 彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7-1-9 規格ビル
TEL 03-363-8 6 0 4 (代表)

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝 比 奈 正 三 (67回)

東京都中央区銀座1-15-6 銀座NSビル4階
TEL 03-563-1 9 2 1 (代表)
米国事業部
イリノイ州シカゴ市ウエストスクール街2031
ジャパンビジネスサービス社内

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥 野 孝 (53回)
取締役社長 奥 野 進 (56回)
取締役副社長 吉 川 善 吉 (56回)
本 社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル
TEL 03-842-6 8 3 1 (代表)
静岡事務所 静岡市安東2-8-14
TEL 0542-46-9 3 7 8

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥 野 孝 (53回)
営業部長 奥 野 広 (58回)
本 社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03-834-5 3 3 1 (代表)